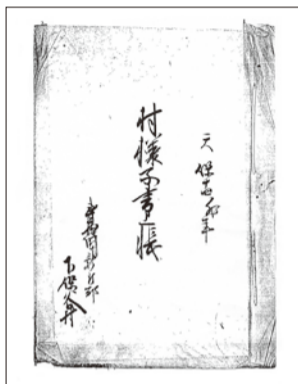


公民館は、現在、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、休館しています。最新情報については、公民館にお問い合わせいただくか、広報西東京や市ホームページでご確認ください。

柳沢公民館 柳沢1-15-1 ☎042-464-8211 kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp  
田無公民館 南町5-6-11 ☎042-461-1170 tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp  
芝久保公民館 芝久保町5-4-48 ☎042-461-9825 shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp

谷戸公民館 谷戸町1-17-2 ☎042-421-3855 yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp  
ひばりが丘公民館 ひばりが丘2-3-4 ☎042-424-3011 hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp  
保谷駅前公民館 東町3-14-30 ☎042-421-1125 ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp

村明細帳(「村様子書上帳」)  
天保十四(一八四三)年に代官に提出された下保谷村の村明細帳の表紙。下保谷村は当時新座郡に属していた(田無村は多摩郡)。  
西東京市中央図書館地域・行政資料室所蔵



江戸時代、現在の西東京市にあたる地域には田無村、上・下保谷村と、一八世紀頃に開発された新田村がいくつかありましたが、そのほとんどが武蔵野台地と呼ばれる台地にありました。この台地の地質が、水田を作る

### 江戸時代の田無・保谷

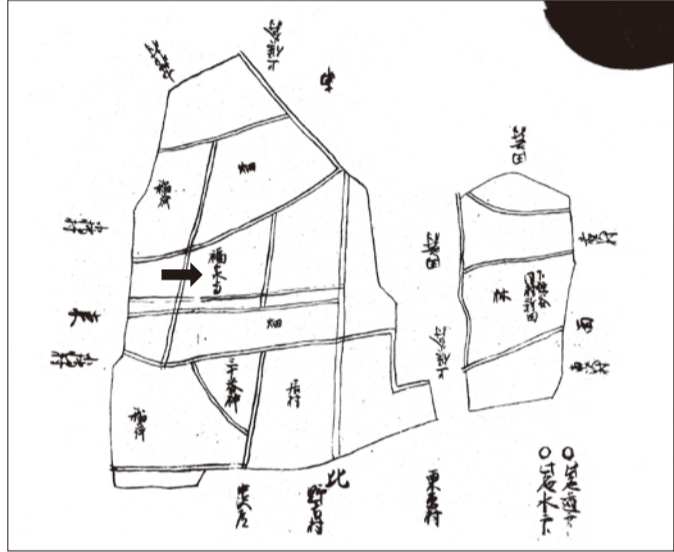
みなさんは、江戸時代の農民について、どのような印象を持っているでしょうか。「年貢が重い」といった情報や、「笠地蔵」のように昔話に貧しい農民が登場しがちなことから、「みんな貧しかった」という印象をお持ちの方も多岐にわたるかもしれません。しかし、実際のところ田無・保谷にかつて住んでいた農民たちはどうだったのでしょうか？西東京市に残る歴史史料をもとに見ていこうと思います。

## 特別紙面講座

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、公民館は3月1日以降休館しています。そこで、公民館だよりで特別紙面講座を行います。今月号から3回連続で江戸時代の西東京市域を取り上げます。学びを深め、楽しんでいただけたらと思います。

### 第一回 農民たちはみんな貧しかったのか？ — 歴史史料から組み立てる村のすがた —

行田 健晃



村絵図(下保谷村)  
村明細帳と同年に提出された下保谷村の簡略な絵図。「畑」や「林」のほか、矢印(筆者加筆)で示した所には今も下保谷にある福泉寺の名がみえる。  
西東京市中央図書館地域・行政資料室所蔵

### 村明細帳から見る村の姿

江戸時代の村の様子を知るためには、「村明細帳」という史料が有用です。村明細帳は、村がその地を直接支配する武士(代官)の求めに応じて提出した村の状況についての帳簿です。まずはここから地域の様子を探ります。  
天保一四(一八四三)年の田無村の村明細帳によれば、この時期、村の家数は二六四軒、人口は一九二人でした。  
一方、同じ年の下保谷村の村明細帳を見てみると、こちらには家数一一五軒、人口五三五人とあります。また村明細帳ではありませんが、上保谷村は幕府の記録に、文化・文政期(一八〇四〜一八三〇)に家数三〇〇軒余りであるので、田無村と同じくらいの規模でしょうか。畑地が多い関係で、今より圧倒的に人が少ないことがわかります。

さて、そのほかにも村明細帳にはさまざまなことが書いてあります。村に水田がないので米がほとんどできず、年貢は貨幣で代納していること、農業のほかにしていることは、男は下肥(肥料)を江戸から買って運ぶ、女は薪を採るくらいであること、村が困窮していること。これらが、田無村・下保谷村の村明細帳に共通して書かれています。

### 村明細帳は信用できる？

江戸時代の生活は今よりも安定していませんでしたから、困窮する農民がいたことは事実です。また天災によって生活が破壊されることもよくありました。しかし、それを差し引いても村の自己申告を基に作成された帳簿の内容を、すべて本当のことだと信用してよいのでしょうか？

### 玉川上水・江戸・青梅街道

実際、この地域の土地はやせていましたが、一八世紀初頭に玉川上水の分水が田無や保谷に届き、耕地開発が進むと村の様子は大きく変わりました。下保谷村の戸数は江戸前期の一・七倍になり、田無村には生活水準が向上して幕末までに人口が倍になったと述べる史料が残っています(田無村の人口は幕末に一六〇〇人を突破)。江戸中期に人々の生活は改善したのです。さらに、この地域の地理的条件として江戸に近いというものがあります。田無でも保谷でも、



やすらぎのこみち  
筆者が昨年撮影。田無駅近くのこの小路は、この地を流れていた玉川上水の分水の名残。

作物の多くは、自分たちで食べるほかに、江戸に売りに出されたのです。田無村には安政四(一八五七)年の記録として、売った作物の利益が村全体で六〇〇両(物価の関係で換算は難しいが幕末の両は約一万円)にもなるとの記述があります。また、林畑の多い下保谷村では採れた新米江戸向けに売っていたようです。

### 献金に見る農民の財力

最後に、富裕な農民の財力を示す記録を見てみましょう。江戸幕府は、幕末に欧米が日本に接近してくるようになると、海防のために江戸湾に台場を造るのですが、この費用の負担が田無や保谷にも「献金」を迫る形で降ってきました。献金ができる家はある程度裕福とはいえませんが、この時の記録を見ると、下保谷村からは八家が合計三〇両を、田無村からは三〇家が合計で実に約二〇〇両を拠出して、田無村の「献金」の内、半分の一〇〇両は下田家という一つの家によって負担されています。そして、富裕な農民の中には、村の代表である「名主」になる者もいました。たとえば先に述べた下田家は田無村の名主です。次回は、この名主の仕事・役割についてお話ししたいと思います。



行田 健晃(ぎょうだ たけあき)  
1993年生、東京都東久留米市出身。現在、都内私立中学・高等学校教員。修士論文「幕末の百姓と武力」執筆の際の史料調査が縁となり、2017年から毎年夏に開催される西東京市図書館主催の「子どものための地域を知る講演会」で講師を務める。著作に「融解する町・村の境界線」(大石学監修・東京学芸大学近世史研究会編「江戸周辺の社会史」名著出版、2018年)などがある。